

五箇山の念仏道場と仏教行事の変化に関する研究

—利賀地区を中心として—

The Transition of Nenbutsu Dojo and the Religious Rites in Gokayama

: Focusing on the Toga District

瀧澤 侑加

TAKIZAWA Yuka

1. 序章

(1) 研究の背景

五箇山とは、富山県南砺市の、岐阜県との県境に位置する地域のことであり、五箇山は平地区、上平地区、利賀地区の3つの地区によって構成される。この地域には「念仏道場」と呼ばれる仏教寺院の一種が数多く存在し、大きな特色となっている(図1)。

念仏道場(以下道場)とは、浄土真宗における寺院の初期形態のことである。道場は15世紀以降、全国に数多く開かれ、民衆への教化の中心を担ってきた。それらの道場の多くは、江戸時代中期以降寺号を取得し、「寺院」となっていた¹⁾。

五箇山の道場は他の地域の道場とは異なり、現在でも道場として残っている。寺号を取得した道場であっても、実際の運営のされ方は寺号取得以前と変わらず、道場としての形態を残している場合が多い。五箇山は道場の生きた姿を残す貴重な地域であると言える。しかし、五箇山の道場の特徴を多角的に捉えた研究は未だ行われていない。

道場の維持を始めとして、長らく伝統的な慣習を伝えてきた五箇山地域は、現在急激な過疎化という問題を抱えている(図2)。それに伴い、住民の生活の様子も大きく変化している。終戦直後、五箇山の人口は一時的に増加したが、高度経済成長が始まると同時に若年層を中心として都市部への人口の流出が始まった²⁾。

昭和50年代までに交通網が整備され、平野部との往来が容易になったため、減少率は鈍化したが、その後も五箇山の人口は減少を続けており、現在では戦後のピーク時の三分の一程の人口となっている。

昭和60年発刊の平村史では、このような急激な過疎化・高齢化に伴い、共同作業や奉仕活動の停滞や、伝統的行事の継承不能などの弊害が起き、村の活力と村の魅力が失われると指摘されている³⁾。寺・道場と住民との関わりもまた、高度経済成長期以降の過疎化・高齢化に伴う影響を受けていると推測するこ

とができる。



図1 相倉集落の西方道場(筆者撮影)

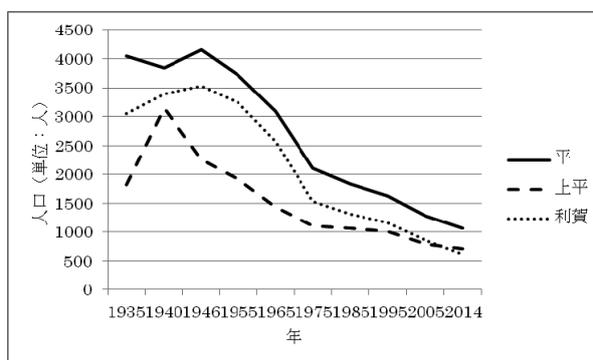


図2 五箇三村の人口の推移

(1935~2005年は国勢調査より

2014年は4月現在の住民基本台帳人口)

(2) 研究の目的

以上の背景を踏まえ、本論文は以下の三点を目的とする。

- ①五箇山の道場の特徴を明らかにする
- ②道場が果たしてきた役割を把握する
- ③道場と住民との関わりの変化を把握し、その原因を明らかにする。

(3) 論文の構成と調査方法

第二章では文献調査をもとに、地区ごとの道場の現状を把握し、特徴を明らかにする。第三章では聞き取り調査及び実測調査によって、道場が担ってき

(4) 三村の寺・道場の比較

創立年代は三地区ともに古くは室町後期まで遡る。平地区と利賀地区には比較的新しい、明治期創立の道場がある。

大多数の道場の建築年代は江戸時代後期から昭和40年代である。建築が古いものは平地区と上平地区に多い。

民家の一室に道場がある内道場は上平地区には見られない。寺号を取得している道場は三地区全てに見られるが、古くから寺基を構えていた寺院があるのは平地区と利賀地区である。五箇山で見られる寺・道場の形態を全て持つのは利賀地区である。

表1 三村の寺・道場の比較

	平	上平	利賀
内道場	1	0	2
寺号取得	8	4	3
上記以外	15	7	3

明治期以降、道場の数は三地区全てで減少している。特に減少数が多いのは利賀地区である。廃された道場のうち、上平地区と利賀地区の5例はいずれも離村により集落が無住となったことが原因である。平地区上松尾集落では現在も集落に人が住んでいるが、道場の建物は近年取り壊されている。

表2 寺・道場数の変化

	平	上平	利賀
明治期	25	12	12
現状	24	11	8
減少数	1	1	4

集落の中心部に建てられている道場は三地区合計で85%であり、残りの15%は集落の高台の、周辺に民家の少ない土地に建てられている。いずれの地区でも集落の中心部に位置する道場が多数派であり、利賀地区では全ての寺・道場が集落の中心部にある。中心部に建てられている道場の中にも、傾斜地の比較的高い位置に建てられているものが三箇所ある。

3. 道場の役割

本章及び次章では、複数の形態が見られる利賀地

区の寺・道場を主な対象とする。

(1) 寺・道場と住民との関わり

道場はそれぞれ本寺と呼ばれる寺を持っており、本寺の出先機関として機能している。例えば、大豆谷集落では、冬期の交通が困難であった時代には、冬に亡くなった人の葬式は道場役を中心として行い、事後に本寺に報告することとされていた¹⁰⁾。五箇山の住民は道場ではなく本寺の門徒である。これは道場が寺号を取得している場合も同様である。住民及び道場役への聞き取りによれば、本寺が遠方の場合、本寺を訪れることは殆ど無い。本寺は報恩講や年忌法要のときだけ五箇山を訪れる。それ以外の仏教行事(後述)は道場と住民とによって行われている。冬季の交通が困難であった時代には、道場役が葬式を行うこともあった。

一部の道場はかつて分教場として使用されていたことがある¹¹⁾。子供の遊び場として利用されていたものもある。他の集落から集団で訪れがあったときや、遭難者を介抱するときに開放されることもあった。また寄合の場として現在でも使用されることがある¹²⁾。

日常的な掃除や手入れは道場役の仕事であるが、夏の草刈りや冬の雪囲いの設置は住民総出で行われる。光熱水費等は集落の住民全体で負担し、改修や増改築の費用は集落の住民を中心として、五箇山内外からの寄付金によって賄われる。

(2) 寺・道場の建物

道場の建築規模及び間取りは似通っている。道場は多くの場合、道場役の家に隣接する。

建物正面には向拝が設けられ、外陣奥に一段上がって内陣が設けられる。内陣奥にさらに後堂が設けられている場合もある。内陣横には余間が設けられ、尊像は内陣と余間に安置される。以上の特徴は浄土真宗の寺院の典型的な様式である。

道場には必ず喚鐘と太鼓が吊り下げられている。これは平地区と上平地区でも同様である。利賀地区の道場全てに台所が設置されており、便所も一つを除いた全ての道場にある。これらは五箇山の道場の特徴と言える。改修や増築によって水回りの設備を充実させることが多く、道場が多くの人によって利用されることを示している。

表3 道場の間取りと仏具

		興真寺	齋光寺	大豆谷道場	上島道場	岩淵道場
間取り	内陣	○	○	○	○	○
	外陣	○	○	○	○	○
	矢来内	○	○	×	○	×
	後堂	○	○	×	○	×
	台所	○	○	○	○	○
	便所	○	○	○	×	○
尊像 仏具	五尊	○	○	○	○	○
	太鼓	○	○	○	○	○
	鐘	○	○	○	○	○

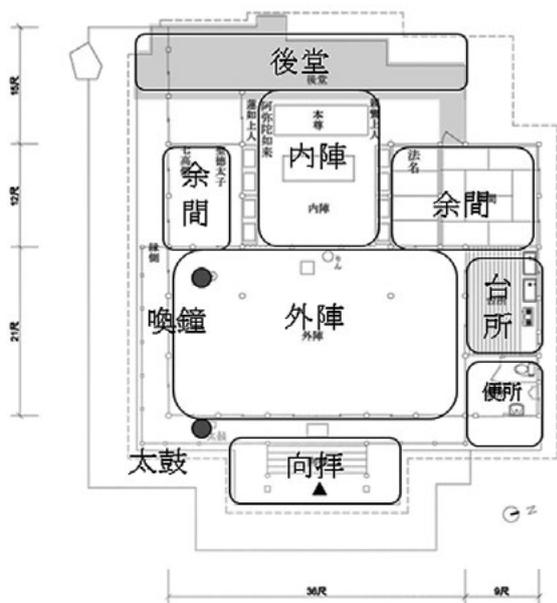


図6 興真寺平面図(高松花作成 一部改変)

4. 仏教行事における道場と住民との関わりの変化

(1) 仏教行事

利賀地区で行われている仏教行事は図に示した通りである。仏教行事は一年間を通して行われているが、農閑期にあたる冬季に行事が数多く行われている。行事は寺・道場が中心となって行う行事と、住民が中心となって行う行事があり、後者は「在所の行事」と呼ばれている

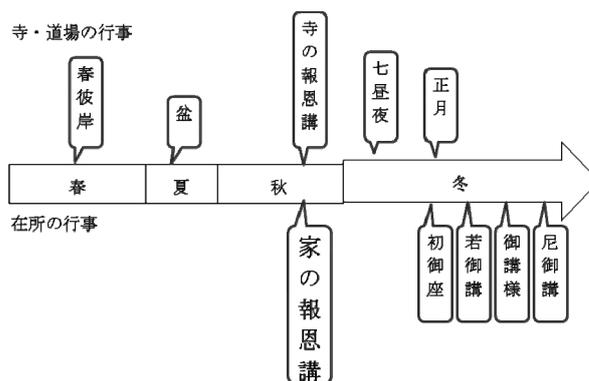


図7 利賀地区の仏教行事

(2) 仏教行事の変化と道場の変化

利賀地区の仏教行事は、集落ごとに行われているものと行われていないものがある。道場で行われるか、公民館や民家等の他の場所で行われるかは行事ごとに異なっている。そのため行事によって、その変化が道場に与える影響の大きさに違いがある。オコウサマは道場が会場として使われる場合が多く、また1月～3月にかけて複数回行われるため、頻度や内容など道場に与える影響が大きい。

道場で行われている行事における変化は以下の6つに分類できる。すなわち、①行事の廃止 ②食事の簡略化 ③参詣者の著しい減少 ④道場以外の会場への移動 ⑤期間の短縮 ⑥他の行事との同化である。いずれの場合も住民が道場を訪れる頻度の減少に繋がっている。

①は上島集落・北豆谷集落・大豆谷集落のオコウサマにおいてみられる。北豆谷と大豆谷では戦後まもなく行事が廃止された。上島では近年、道場坊が多忙のため行事が廃止された。

②は上島集落のソウギサマ、岩淵集落と利賀集落のオコウサマ、利賀集落の寺の報恩講とゴマンザにおいてみられる。いずれの場合も道場で供されていた食事が、お茶とお菓子のみ等の簡単なものに変化している。聞き取り調査では行事の負担を軽減するためとの声が聞かれた。

③は大豆谷集落の寺の報恩講と上島瀬の春の彼岸会で起きた。前者では毎年訪れていた上島瀬の真光寺門徒が離村したためである。後者は毎年参詣していた門徒の多くが高齢のため亡くなったり、外出が困難になったりしたためである。

表4 行事における寺・道場への参詣の有無

	ハツオザ		オコウサマ		ワカオコウ		アマコウ		正月（修正会）		春のお彼岸		お盆		寺の報恩講		お七夜	
	70年前	現在	70年前	現在	70年前	現在	70年前	現在	70年前	現在	70年前	現在	70年前	現在	70年前	現在	70年前	現在
西勝寺									○	○	○	○			○	○		
上島道場	○	○	○		○	○			○	○					○	○		
細島内道場		○							○	○								
岩淵道場	○	○	○	○	○	○			○	○	○	○			○	○	○	○
興真寺			○	○	○				○	○	○	○			○	○	○	○
大豆谷道場			○						○	○					○	○	○	○
齋光寺			○						○	○	○	○	○	○	○	○		
上百瀬内道場		○		○						○								
押場道場			○						○						○		○	

④は岩淵集落の新年会、利賀集落のワカオコウ、上百瀬集落のオコウサマとツイゼンで起きた。利賀のワカオコウと上百瀬のツイゼンは会場が公民館に移動した。それ以外の事例は道場にお参りするものの、その後会場を公民館に移して食事をするようになった。

⑤は利賀集落のオコウサマで頻度が減少し、同じく利賀集落の盆のお勤めが3日間から1日のみとなった。道場役からの聞き取りによれば、盆は参詣者が減少したため1日だけにしたとのことである。

⑥は細島集落と岩淵集落でワカオコウとハツオザ同日に行われることとなった。負担の軽減に加え、もともと行われる時期が近いこともあり、参詣者が共通しているために起きたのであろうと推測できる。

5. 結論

(1) 総括

道場の特徴として、まず本寺の出先機関として機能してきたことが挙げられる。また、間取りと仏具からは真宗寺院としての特徴と、太鼓や台所などの道場としての特徴を兼ね備えていることがわかった。

比較的大規模な集落に分布し、集落の中心部に位置しているものが多いこと、仏事以外にも寄合等に利用されることから、道場は集落の生活の中心に位置していると言える。

道場の変化と要因について、まず建物の観点からは、昭和期以降、水回り等の増改築が行われていることが挙げられる。この要因は公共空間としての利

便性が求められたためであると考えられる。また行事の観点からは、行事数の減少や行事の頻度の減少のために、道場の利用回数も減少したことが挙げられる。この要因は参詣者と行事の担い手が減少したことにあるが、更にその要因は五箇山全体で人口が減少したこと、仏事の主な担い手層であった主婦層や高齢層が働きに出るなどして多忙になったことである。

(2) 今後の展望

これまでの結果を踏まえ、道場の価値は、宗教と日常が密接に結びつく形で維持されてきたことが具体的な形として残していることにあると言える。

今回の調査では、状況の変化に伴い行事はいくつかの点で形を変えているが、多くの行事は継続して現在も行われていること、道場の維持管理は今も昔も集落全体で行われていることが分かった。

今後の展望として、間取りや仏具に表れている道場の特徴を継承していくことは当然のこととして、日常生活と密接した道場のあり方を継承していくことが重要であると考えられる。具体的には、行事の存続、金銭面、労働面での維持管理の負担の分担、仏事以外での利用を続けていくことが挙げられる。

注

注¹⁾ 筆者聞き取りより

参考文献

1) 真宗大谷派教科書編纂委員会：教団のあゆみ-真宗大谷派教

- 団真宗大谷派宗務所出版部、pp.71-72、1986
- 2) 利賀村史編纂委員会：利賀村史、利賀村、pp.608-624、2004
- 3) 平村史編纂委員会：越中五箇山平村史上巻、平村、p.970、1985
- 4) 南砺市 HP 南砺市の人口<
<https://www.city.nanto.toyama.jp/cms-sypher/www/info/detail.jsp?id=12288>>2014年11月25日アクセス
- 5) 平村史編纂委員会編：越中五箇山 平村史 上巻、平村、pp.204-266、1985
- 6) 南砺市 HP 南砺市の人口<
<https://www.city.nanto.toyama.jp/cms-sypher/www/info/detail.jsp?id=12288>>2014年11月25日アクセス
- 7) 上平村役場 編集・発行：上平村誌、pp.328-471、1982、及び寺伝資料より
- 8) 南砺市 HP 南砺市の人口<
<https://www.city.nanto.toyama.jp/cms-sypher/www/info/detail.jsp?id=12288>>2014年11月25日アクセス
- 9) 利賀村編纂委員会編：利賀村史3 近・現代、利賀村、pp.972-975、2004、利賀村及び寺伝資料より
- 10) 高田やい：南大豆谷念仏道場、富山史壇104、越中史壇会、p.43、1991
- 11) 利賀小学校創立百周年記念事業実行委員会 編集・発行：利賀小学校創立百周年記念誌-こぶし、pp.81-82、1992